

仕事の合間にひと時の休息を。 働く人の癒しマガジン

YELL

癒え～る

春号

「ほっ。」と エピソード

企業の採用と人財育成を支援する会社、「採用と教育」。

その代表・半田真仁が日々現場で出逢い、心動かされたエピソードをご紹介します。

今回は前編・後編の2本立てでお送りいたします！

ご紹介させていただくのは、福島県いわき市で焼き鳥店を経営するA社さんです。

高校の頃から飲食店を経営したいという夢を持っていたA社社長。いつか自分の店を持つことを目標に、キツイ運送業の仕事をしながら、少しずつ資金を貯めていました。

23歳の時、福島市で運命的な出会いを果たすことになったのが、とあるフランチャイズの焼き鳥店。

その店の焼き鳥に惚れ込んだ社長は、どうしてもこの焼き鳥屋をやりたい、と強く願うようになりました。

そして、そのお店に1年以上、足繁く通い続けたのです。

通ううちに店主と仲良くなった社長は、自分も焼き鳥店をやりたい、と店主に相談を持ちかけました。

しかし、返ってきた答えは…

「ぜったい無理」

いわきのような田舎じゃ、実績がない。たったそれだけをズバツと言われてしまったのです。

そう言われても、簡単には諦めることができなかった社長。

とにかく、ひたすら店主に熱意を伝え続けました。

やる気と根性だけは、誰にも負けない自信があったのです。

そんな社長に心を動かされ、店主は徐々に、社長を応援してくれるようになりました。がんばっている社長の見えないところで、ひそかに社長の友人知人に聞き込みをし、社長がどんな人物なのか確かめ… その上で、社長の人柄を信頼し、新店舗のオープンを、全力で支援してくれたのです。

こうして店主からお墨付きをもらった社長は、25歳の時、いわき市内に念願のフランチャイズ店舗を構えることになりました。

心からやりたかった、自分のお店を持つことができた社長。仕事に情熱を燃やし、本当に一生懸命に働きました。

自分に厳しく、スタッフにも厳しく。

こだわりの美味しい焼き鳥は、たちまち評判を呼びました。

しかし、開店3年目に、売り上げが傾いてしまいました。

いままで全力で頑張ってきたのに、どうして…。そんな思いがあった社長は、ますます厳しく仕事を頑張らざるを得ませんでした。

気がつけば、店の雰囲気は悪く、スタッフ同士の仲もギクシャク…すっかり悪いスパイラルにはまっていたのです。

このままではいけない。

社長は、お店に新しい風を入れることを決意しました。

もともと、開店5年目には2号店を出す！という目標を持っていた社長。これを機に、独立して自分の店を持ちたいという人を育ててみることにしたのです。

社長がそれまで一緒に仕事をしていた仲間はアルバイトスタッフでしたが、このとき初めて「弟子」を持ったことになります。もちろん、お弟子さんを持ったからといって、急には上手く行きませんでした。

社長はなおも仕事に精をだされていましたが、うまくいかないことも多々ありました。この時期、仕事の厳しさに負け何人かのアルバイトスタッフがお店をやめてしまうなど、社長にとってはつらい出来事も続きました。

しかし、人を育てていくうちに、社長は気づかれたそうです。

まず、仕事を覚えてもらうには、叱るよりもまずやってみせてあげるほうがいい、ということでした。それから、ちゃんとできたら、たくさん誉めること。

社長が少し意識を変えたことで、店の雰囲気は和やかになっていきました。スタッフも楽しそうに、それまで以上に仕事に打ち込むようになっていきました。

「厳しくするだけではだめだったんだ」

厳しさも時には必要だけれど、それはスタッフに対する愛情があってこそ、だったのです。

指示の仕方も分かってきました。

あれをやりなさい、これをやりなさい、と事細かに指定するだけではだめ。丸ごと任せっきりにして全然フォローしない、というのもだめ。相手の仕事の習熟度によって伝え方を変えてあげる。初めはどんなにできなくても、信じて任せてみる。

すると、どうでしょう。

現場の回転が、ぐっとよくなりました。

さらに、いつも感謝の心、前向きな心で仕事をするのを全員で心がけました。どうすればお客様に、そして仲間に喜んでもらえるか、チームのひとりひとりが考えていました。ノ

こうして、社長の焼き鳥店に、徐々に光が戻ってきました。

雪雲が去り、穏やかな春がやってきたかのように、気づけば店内には、あたたかい笑顔の花が咲き始めていたのです。そして、5年目にはお弟子さんが独立。待望の2号店が始動しました。

その店舗が、曲折を経て軌道に乗ったところのことです。社長に、フランチャイズの本部から声がかかりました。

「研修店舗をやってみないか？」

研修店舗とは、独立してフランチャイズ店を始めたい人を育成・支援する店舗です。社長のやってきた人材育成の実績が、このような形で高い評価を受けたのです。

お金のためだけでなく、お客様の笑顔のために…そんな志をもって働く人材を育てたい。そんな考えを持っていた社長は、これを引き受けます。

そしていまでは、社長のもとで育った若者は、関東・東北を中心とする東日本地域に、60人を超えるまでになりました。

現在、社長が出された最初の店舗は、15周年を迎えられました。

これからも、皆様から“ありがとう”と言われるお店作りを目指している社長。今後は、地域の障がい者の雇用にも力を入れていきたいそうです。

現在、社長のお店で働いている8名のスタッフのうち2名の方は、知的障がいを持った方です。

お二人は現在、焼き鳥店の業務の中でも最も大きなウェイトを占める、串打ち(具材を串に刺す)作業を担当されています。

初めはどうしても時間がかかってしまったそうですが、練習を重ねると間もなく、すばやく具材を串に刺せるようになりました。

「二人が来てくれるようになってから、スタッフ皆の気持ちが悪くなって、チームに一体感が生まれました。

二人が昼間一生懸命仕込みをしてくれるから、夕方からの営業にも、さらに心がこもるようになったんですよ。

今後は仕事の内容や形態も工夫して、障がいを持った方の雇用ももっと増やしていけたらいいなあ…」

そう語る社長の言葉は力強く、優しさに満ち溢れておられました。

◎次号のほっとエピソードは、この焼き鳥店でアルバイトとして働いていた留学生の方がきっかけとなり、社長がミャンマーに学校を建設されたお話です！お楽しみに♪



半田真仁(はんだしんじ)
——「採用と教育」代表

社内活性化アドバイザー&コンサルタント
人財育成サポーター

こころほっと ニュース。

最近起こった、心温まるニュースをご紹介します。今回は、年末年始に日本中をほっこりさせた、あのちょっと素敵な慈善運動のお話。

昨年末から今年の1月にかけて、日本中をにぎわせた「タイガーマスク運動」。2010年12月25日、群馬県の児童相談所にランドセル10個が寄付されました。

その差出人の名前は、「伊達直人」。

「伊達直人」は、漫画「タイガーマスク」の主人公で、自らが育った孤児院へ素性を隠して寄付をする人物です。

おそらく、このランドセルを寄付した人物が、洒落で名乗ったのでしょう。

この出来事がニュースで報道されると、善意の輪はまたたく間に日本中へ広がっていきました。全国各地に複数存在すると思われる「伊達直人」から、児童養護施設へ匿名の寄付が相次いだのです。

この一連の寄付行為は、「タイガーマスク運動」と呼ばれるようになりました。

ランドセルのほか、寄贈された物品は、おもちゃや筆記用具、現金や金券、食品など多岐に渡り、差出人も「伊達直人」以外にも様々な著名人やキャラクターが登場しました。

届け先も、老人保健施設や警察、大手スーパーなどに及びました。

寄付者の中には70代以上の年長者や小中学生と見られる人物もいました。施設内で上級生が下級生に匿名の贈り物をしたケースもあったそうです。

日本人は欧米人と違って、慈善活動で名前を売ることがあまり好みませんが、いい事をしたいと考えている人は多いものです。

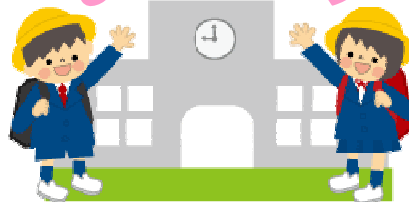
この「タイガーマスク運動」は、「伊達直人」をはじめ、キャラクターや著名人の名前を借りて、慈善キャラになりきることができるので、気軽に贈り物や寄付をしたいと思っていた人たちにとってはチャンスになり、ちょっとしたブームになったと考えられています。

でも、流行性が先立ってしまったためか、今のところ、この小さな善意の連鎖反応は終息してしまったようにも見受けられます。

また年の瀬がめぐって来たらぜひ、「伊達直人」には帰ってきてほしいものですね。

参考:Wikipedia

ありがとう



ほっ。と ストーリー

人には、人それぞれの人生があり、
100人いれば、100通りの歴史や物語が
あります。
ここでは、そんな数々の人物伝の中から
一人ピックアップして、ご紹介します。

ココ・シャネル

(Coco Chanel, 1883-1971)

本名ガブリエル・ボヌール・シャネル。

11歳で母親が他界後、孤児院や修道院で育つ。

「ココ」は愛称で、芸能界をめざしカフェで歌ってい
た歌の題名が由来。

一流の男たちとの華やかな交際から恋多き女と言わ
れながら、生涯独身を通した。

「なぜ」が世の中を目覚めさせる

12歳の少女は母親が死に、父に捨てられ、
孤児院に入る。

孤児院を出た彼女は裁縫の仕事についた。

そして、趣味でつくった帽子のデザインが認められ、
27歳で帽子専門店を開店。
30歳、服飾小売店を開店。
33歳、デザイナーとして、
オリジナル・ブランドを発売することになる。

当時の女性はコルセットをつけて、
重いドレスを着て、
おとなしくしていることが当たり前だった。

彼女は自分自身に問いかけた。
「なぜ、女性はきゅうくつな服装に
耐えなければいけないのか？」

彼女の「なぜ」は
世の中を目覚めさせる
黄金の答えを導き出した。

その結果、シンプルで着心地がよく
ムダのないドレスが誕生した。

さらに彼女は問いかけた。
「なぜ、女性はドレスを着て、
おとなしくしていなければならないのか？」

この疑問から、軽快なパンツ・スーツのスタイルが
誕生した。

彼女の疑問は当時の女性の価値観を変え
女性が社会で活躍するきっかけとなった。

そして、さらに彼女の
「なぜ、香水はどれも同じ香りなのか？」
という疑問から、
いろいろな香水の試作品が誕生した。

彼女はそのうちの10種類の試作品を
お店の顧客に無料でプレゼントした。
すると、それが大評判に。

とくに人気だった試作品のひとつを
百貨店で販売することになる。

その試作品は5番目にできた製品なので、
名前を「No.5」とした。

そう、彼女の名はココ・シャネル。
ドレス嫌いで、ショートヘアのファッション界の革命児は
常に「疑問」を投げかけ、
世の女性に「質の高い人生」を与えた。

彼女は常に、「古い価値観にとらわれない」を信条に
「女性の心と体を解放させる」というビジョンを達成したのだ。

「なぜ」は世の中を目覚めさせる
黄金の答えを引き出してくれる。

あなたの「なぜ」をもう一度、書き出してみよう！

世の中が目覚めるときを待っている！



コラム

世界中の女性が、着心地のよいファッションに身を包み
自分らしい人生を送ることができるようになったのは、ココ・
シャネルのおかげかもしれません。

知らず知らずのうちに、固まってしまった価値観にとらわ
れている自分に気づく。そんな瞬間が、誰にでもあると思い
ます。

春は、目覚めの季節。

自分の心がふとつぶやいた「疑問」に耳を済ませてみれば、
何か気づきがあるかもしれません。

その疑問がいつしか、自分や、見知らぬ誰かの人生を、
素敵に変えてゆくのかも。

今回の物語

「情熱思考」

中協出版, 2010

是久 昌信 著

より抜粋。





癒しの写真館

Vol.3 アルパカ…です？

すっとんきょうな表情とつぶらな瞳、妙に細長い首など、まるで宇宙生物のような、それでいてどこと無く憎めない風体で人気急上昇中なのが、アルパカ。

羊などと同じく、毛を衣類の原料とするために飼育されています。写真左は普通のアルパカ。とっても可愛いですね！

しかし、今回、癒し画像としてご紹介したかったのは、写真右、オーストラリアの農場に暮らす Mona ちゃん。

彼女は、飼い主の気まぐれでなぜか、毛をプードルのような姿に刈られてしまい、「プードルみたいなアルパカ」として全世界で話題になってしまったそうです。

Mona の暮らす農場には、噂を聞きつけてたいへん多くのお客さんが訪れたということですが、うーん、彼女としては、どんな心境なんでしょうね…。可愛いけど。(笑)

(出典:livedoor ニュース)

■あなたのとおき 「癒し」画像を YELL に 載せてみませんか!?

YELL 編集部では、皆さまの「とおき癒し画像」を大募集しております☆

次号の YELL の紙面を飾り、みんなの心を癒すのはあなたかも！

可愛いペットや素敵な風景など、ココロが「癒え～る」ものなら何でも OK！
たくさんの投稿、お待ちいたしております
(^)

【ご応募方法】

◎下記連絡先「採用と教育 YELL 編集部」宛に郵送。

◎メール(データ)でのご応募も可能です。

件名に「YELL 編集部」宛とご記入ください。

紙面には画像の他、お住まいの地域(県・市町村名)、ペンネーム、写真の説明(100字以内)を掲載させていただきます。そちらも併せて明記して頂きますよう、ご協力お願い申し上げます。

※ご応募の際にご記載頂く個人情報は、「採用と教育」以外の第三者へ開示・提供することは一切いたしません。

今後、ご記入いただいたご連絡先宛てに「YELL」ならびに「採用と教育からのご案内」を郵送させていただく場合がございます。ご不要の場合、お手数ですがその旨をお書き添えいただきますよう、よろしくお願いいたします。

編集後記

O: 4月になって、福島もすっかり春ですね♪

M: はい！4月ですね。今年度も、YELL張り切って書きたいです！

O: 良いですねー！ Mさん、今号のYELLの見どころは？

M: 焼き鳥屋さんのエピソードです！

取材で、実際にお店で焼き鳥を頂きましたが、ほんとに美味しかったですよねー。またお邪魔したいです！

O: えっ、そこ！？笑

M: 花よりなんとかってやつですね。笑

O: あはは…。でも、本当に美味しかったよね。

スタッフさんの中には、障がいを持っている方もいらっやって一所懸命お仕事されていたね。
お店の皆さんの愛情が入った焼き鳥って知ると、何倍にも美味しく感じるね。

M: 本当にそうですね。心が込められている分だけ、すごく美味しく思えました。

お読みいただいている皆様、A 社さんのエピソードは次号にも続く予定なので、どうぞお楽しみに！



「YELL (癒え～る)」について

いつもお仕事をがんばっている
皆さまのもとへ、小さな微笑みと、
癒しのひとときを。

そんな想いでつくったのが

「YELL (癒え～る)」です。

このニュースレターは、これまで
にご縁をいただいた皆さまのもとへ
「採用と教育」広報部より随時お届け
しております。

お忙しい日々の合間に、いつでも
お気軽にお手にとっていただけたら
嬉しいです。

皆さまの職場が、笑顔にあふれますように。

■お問い合わせ

採用と教育 広報部

福島市三河南町 1-20 コラッセふくしま6階

TEL 024-529-5153